

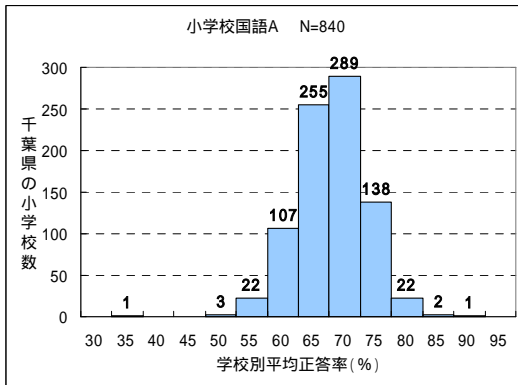
参考資料

この項については、学校及び市町村教育委員会が、それぞれについて分析を進めるにあたり参考となるデータを示す。(特別支援学校については、受検者数が少ないため除く)

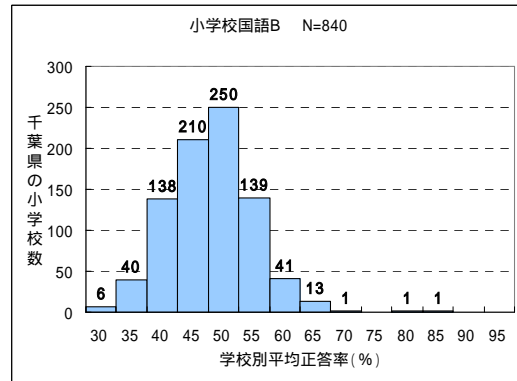
1 学校平均正答率の分布

< 小学校 >

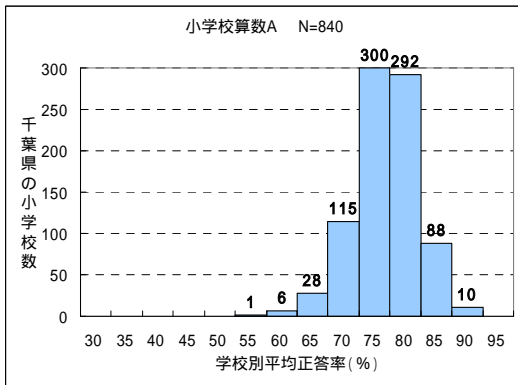
国語 A



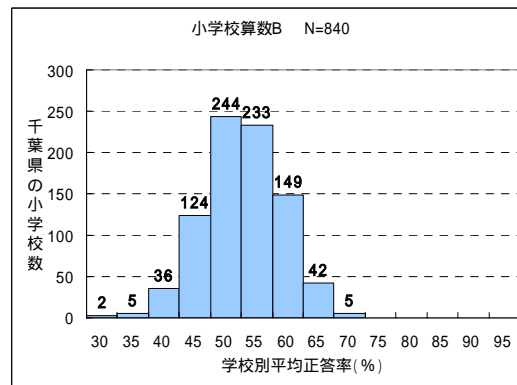
国語 B



算数 A

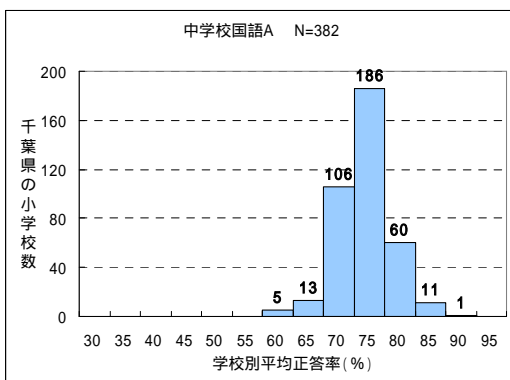


算数 B

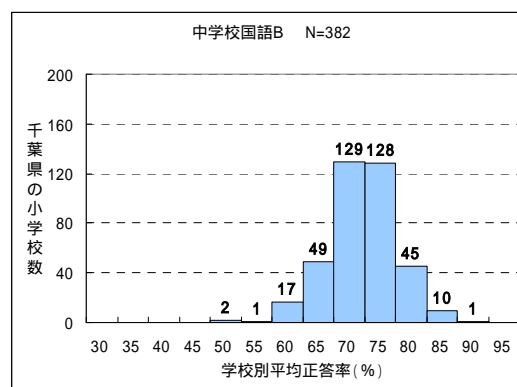


< 中学校 >

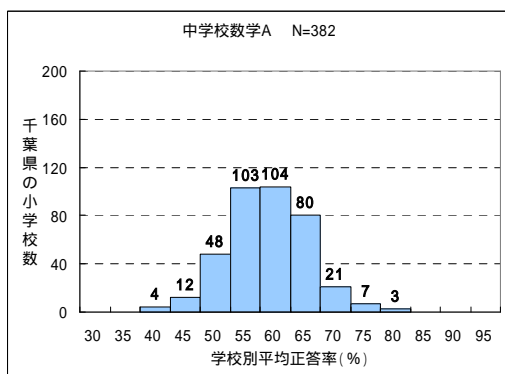
国語 A



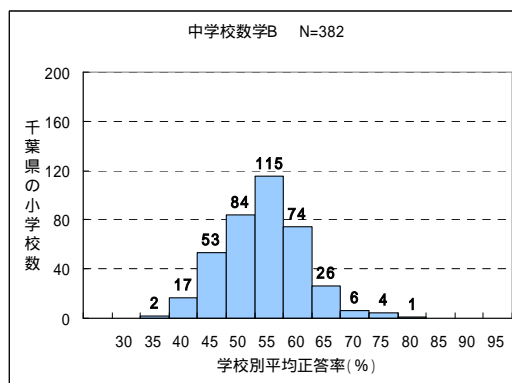
国語 B



数学 A



数学 B

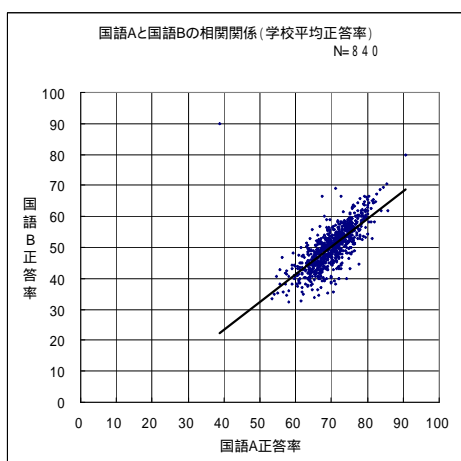


2 A領域とB領域の相関

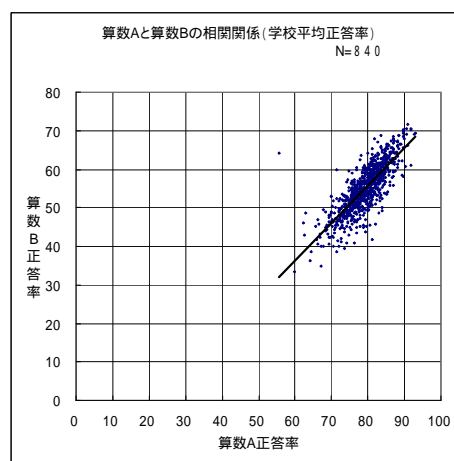
A領域とB領域の正答率には、相関関係があることがわかっている。自校の位置を知り、どちらの領域が課題なのかを把握するための資料としていただきたい。

< 小学校 >

国語 A と国語 B

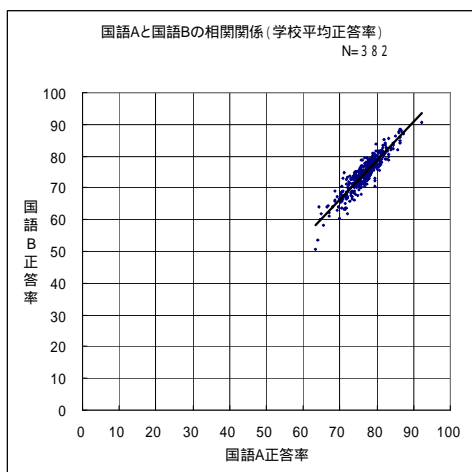


算数 A と算数 B

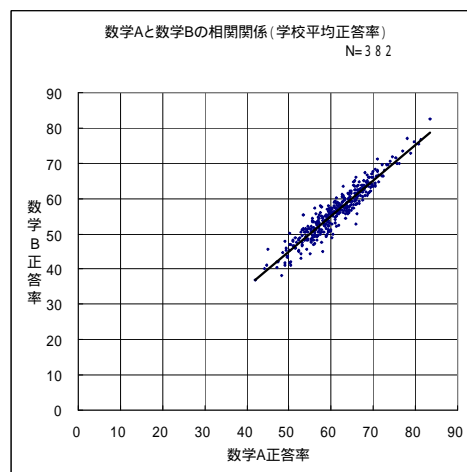


< 中学校 >

国語 A と国語 B



数学 A と数学 B



3 全国と千葉県における正答数層別割合の変化について

正答数ごとの児童生徒数の割合について、3年間の変化を比較するにあたり、千葉県の児童生徒を正答率上位から25%を目安にA層・B層・C層・D層の4つの層に分け、その層ごとの人数割合の変化を指標する。(問題数が少ないために、25%となっていないことに注意。)

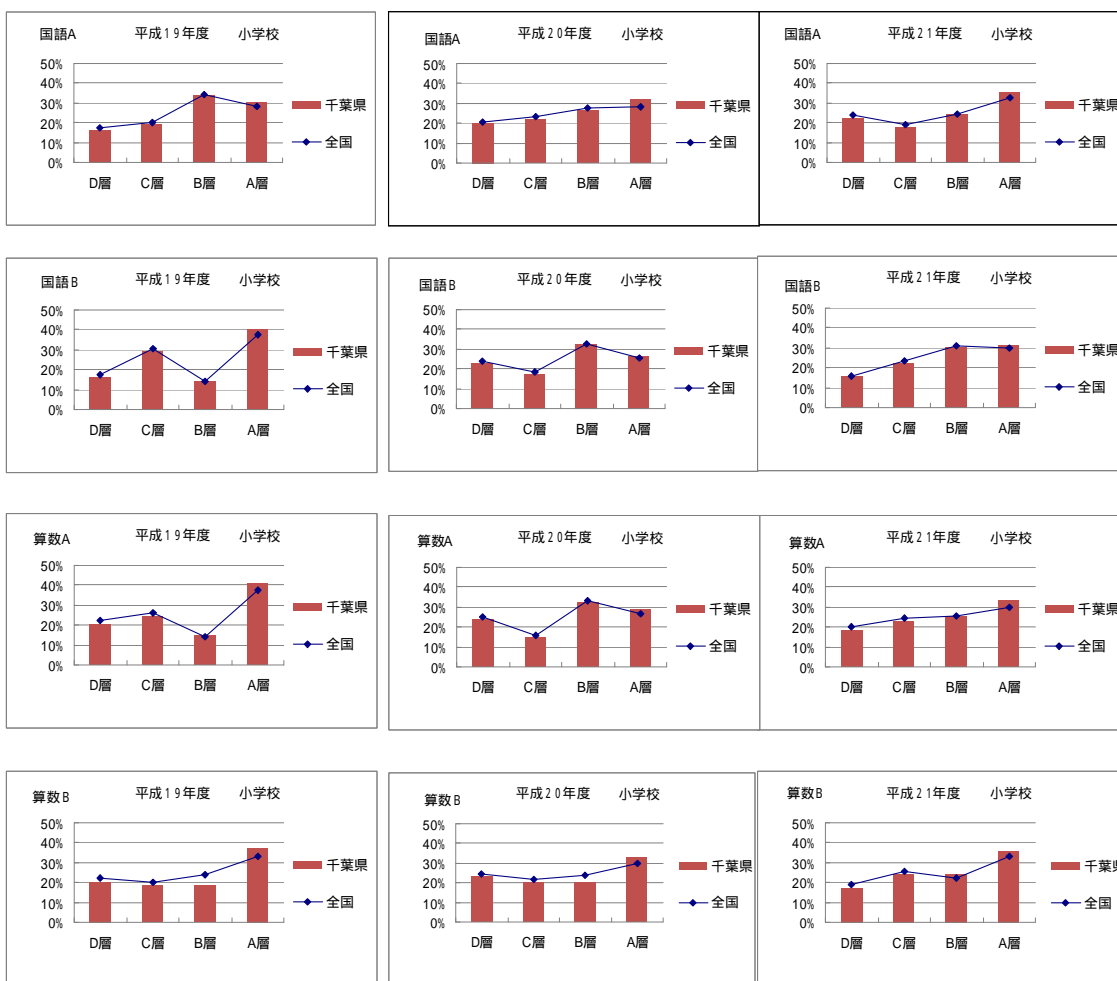
下記のグラフでは、千葉県の割合は棒グラフで、全国平均は折れ線グラフで示している。

小学校について

19年度

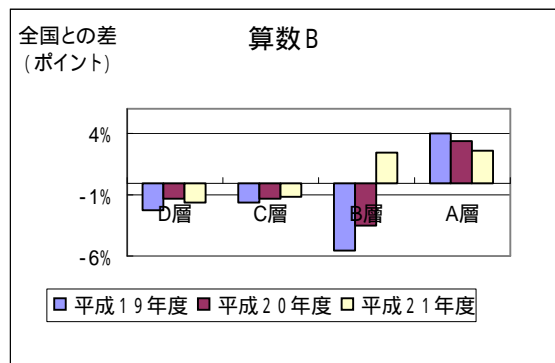
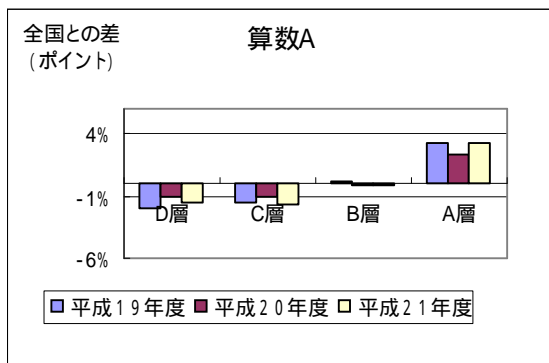
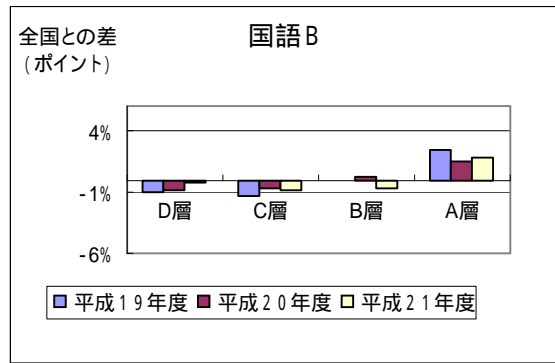
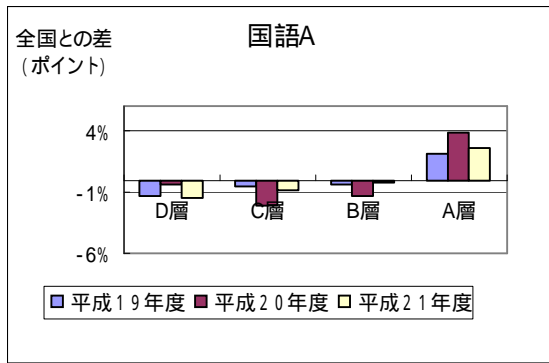
20年度

21年度



3年間、全国の傾向とほぼ同様である。

傾向を詳しく見るために、全国での割合と千葉県での割合を比較したのが次のグラフである。差を縦軸で示しており、プラスの場合には、全国より何ポイント高いかを示している。



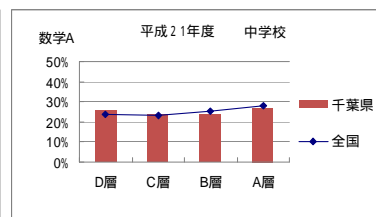
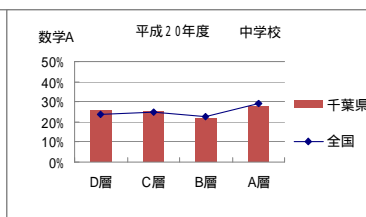
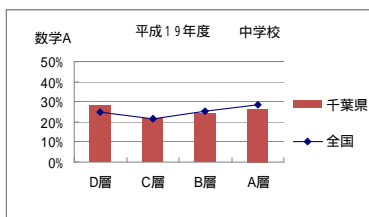
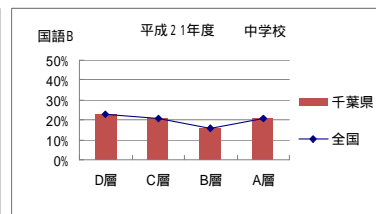
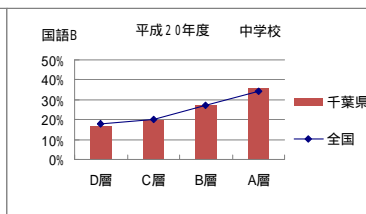
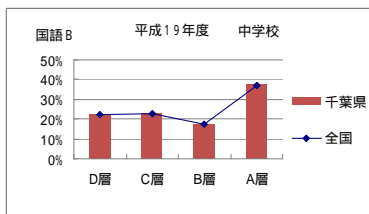
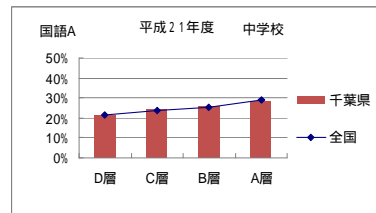
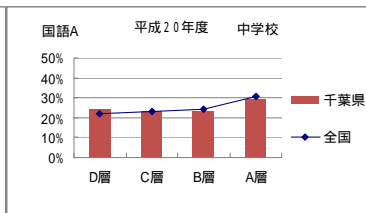
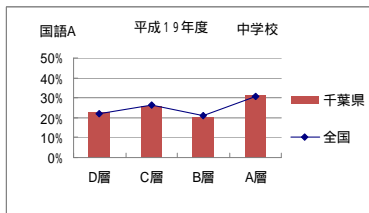
このことから、国語・算数のどの領域においても、A層(正答率上位25%に入る児童)が多い傾向にあることが分かる。

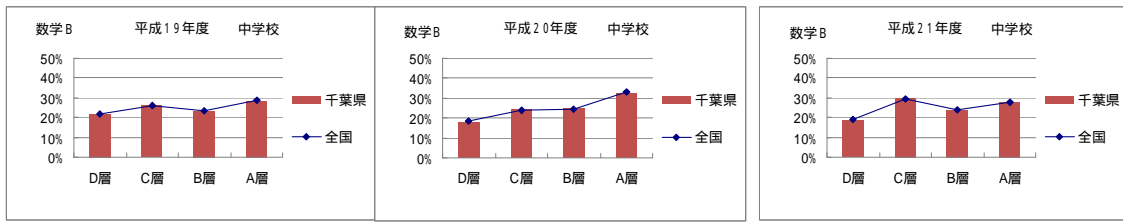
中学校について

19年度

20年度

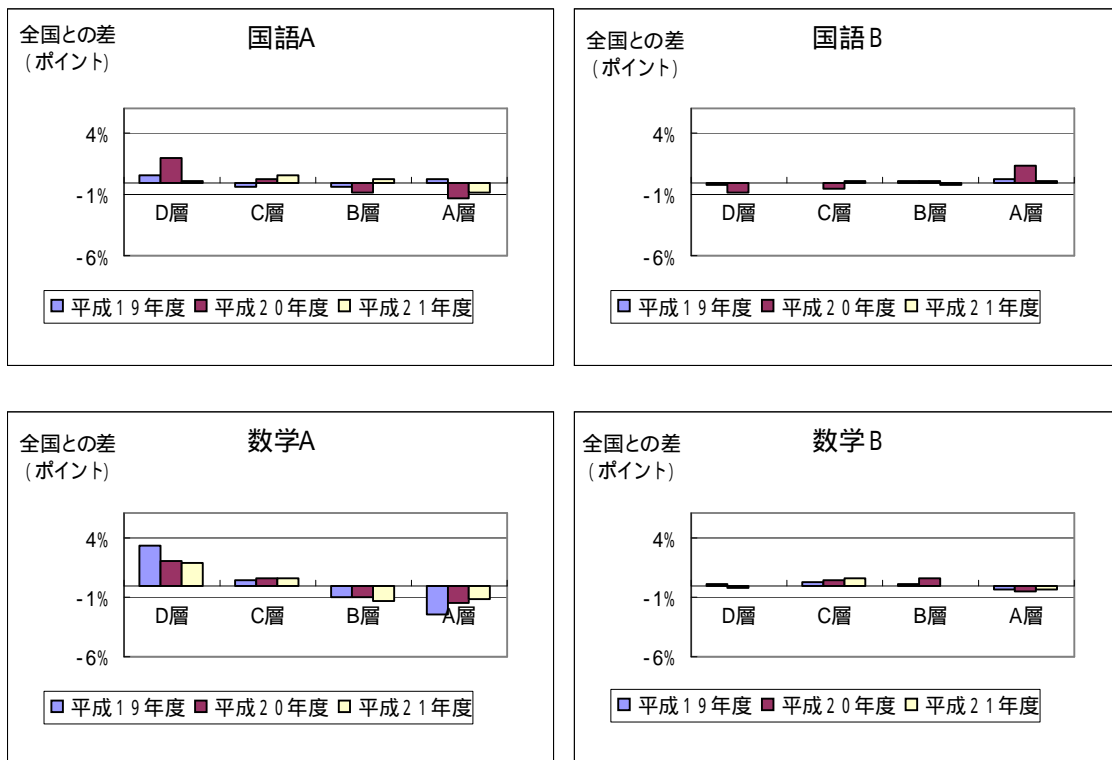
21年度





問題数・問題難易度により各層の割合は25%と異なるが、3年間、全国の傾向とほぼ同様である。

小学校と同様に、全国の割合との差をグラフで示すと以下のようなになる。



国語Aについては、平成20年度にはD層が他に比べて多く、A層（正答率上位25%に入る生徒）が少ない傾向がみられる（2ポイント程度）が平成21年度には、ほぼ全国平均（1ポイント以内）である。国語Bについては、どの層も全国の割合と同程度となっている。

数学Aについては、D層（正答率下位25%に入る生徒）が多くA層（正答率上位25%に入る生徒）が少ない傾向が続いている（2ポイント）が、3年間の中で、徐々に全国平均に近づいていることがわかる。数学Bについては、1ポイント以下の差でありほぼ全国と同じ傾向にある。